

THE collected works of LYDIA SICHER 資料

Same Goal – Differing Styles of Life

(資料1) 最初のパラグラフ

一つ目

目標	与えることを純粋に楽しむ (何ら見返りを求めない)	税金から控除ができる 他人の印象に残るから
行動	気前がいい	

二つ目

目標	母親を他の子どもから遠ざける	
行動	とても良い子でいる	ひどく手に負えない子でいる

(資料2) 2番目のパラグラフの註

7 If the interpretation is made that when Sicher states that a goal cannot be cooperative, and she means the overall goal, then this is not as contradictory as it might appear. If overall goals are abstractions, and stated in very general terms, e.g., strength, wisdom, etc., then her previous statement makes sense that a goal cannot be cooperative or uncooperative. It is only when the personal, concretized goal is extracted from this and given unique meaning by the individual that the uncooperativeness or cooperativeness of the goal can be discussed. Thus, two people could have the overall goal of strength and the personal goal of one could be to be a dictator in whatever social setting. The second person might wish to become an astronomer who discovers new planets that will contribute to the general knowledge. In Sicher's terms, the first person would have an uncooperative concretized goal, on the useless side of life. The second would be embedded in evolution. To be a dictator carries within it its own seed of destruction; there is no way to work toward this concretized goal and be healthy because it violates the laws of living together.

もしジッシャーが目標が協力的でないと述べるときにその解釈（この目標は協力的なものなのでしょうか？）が作られるのであれば、そしてそのときに彼女が全体的な目標を意味するのなら、それは見た目ほど矛盾していません。もし、全体的な目標が抽象的なもので、例えば、強さ、知恵など非常に一般的な言葉で述べられているならば、目標は協力的や非協力的とすることができないという彼女の先の発言は理にかなっています^(訳者注)。そこから個人的で具体化された目標が抽出され、個人によって固有の意味が与えられて初めて、目標の非協力的性、協力的性が論じられます。このように、二人の人間が、強さという全体的な目標を持ち、一人の個人的な目標は、どんな社会環境でも

独裁者になることかもしれません。次の人は、新しい惑星を発見して一般的な知識に貢献する天文学者になりたいと思うかもしれません。ジッヒャーの言葉でいえば、最初の方は、人生の役に立たない側の、非協力的な具体化された目標を持っていることになります。次の人は、進化の中に組み込まれていることでしょう。独裁者になることは、それ自体が破壊の種を内包しています；この具体的な目標に向かって努力することは、共に生きるという法則に反するため、健全でいられるわけがないのです。

(訳者注) 横山さんの本文翻訳から引用

本文 P.118 1.7~

However, a person cannot hold an uncooperative goal. One might have an uncooperative style of life, and an uncooperative pattern, but the goal itself cannot be called cooperative or uncooperative. Also, the prototype is neither uncooperative or cooperative. What can be cooperative is the style of life, the methods that are used to reach the goal. A person might have very excellent goals and prototypes, and yet use methods, tools, that are completely uncooperative.

しかし、人は非協力的な目標を持つことはできません。非協力的な style of life、非協力的な pattern は持つかもしれませんが、目標自体は協力的とも非協力的とも言えません。また、prototype も、協力的でも非協力的でもありません。協力的でありうるのは style of life、すなわち目標到達のために使われる方法です。ある人は素晴らしい目標と prototype を持ちながら、全く非協力的な方法や道具を使っているかもしれません。

(資料3) 野田俊作の補正項「変えられるものと変えられないもの」2017年7月9日

アドラー心理学は「相対的マイナスから相対的プラスへの目標追求性」という《精神力動》にもとづいて人間の行動を考える。しかもその《相対的プラス》とはすなわち《所属》だ。たとえばある非行少年が暴力事件を起こしたとすれば、その目的は《所属》だし、暴力をふるわないと《所属》ができなくなると感じていたわけだ。そうだとすると、暴力を使わないで《所属》する方法を教えることが治療になる。あるいは老人が周囲の人々の接し方について攻撃的に不平を言い続けるなら、その目的は《所属》だし、不平を言わないと《所属》ができなくなると感じているわけだ。そうだとすると、不平を言わないでも《所属》できる方法を考えることが治療になる。パターンはいつだって同じなのだ。しかし、答えは一人ひとり個別に違っている。アンスバッハーは、新カント派の用語を借りて、アドラー心理学は《個性記述的 idiographic》だと言った。一人ひとりみな答えは違っているのだ。

(資料4) 野田俊作の補正項「関係性としての暴力」2013年8月3日

ときどき暴力について話題になる。アドラー心理学は、すべての行動は適応努力であり、共同体の中に居場所を見つけ出すことが目的だと考える。そうだとすると、暴力を振るうのもまた適応努力であるはずだ。暴力を振るって最終的に獲得しようとしている居場所はどんなものかを考えると、二種類ありそうに思う。ひとつは相手より優位に立つこと、ひとつは相手の攻撃から身を守ることだ。前者は相手と仲間になりたいと思っている。もっとも仲間といっても、自分がボスで相手が家来なのだが。後者は相手とは仲間にならないで別の仲間に入りたいと思っている。臨床や学校で問題になるのは、前者であることが多いので、以下はそれについて話をする。後者は、学校などで起

こると、ものすごい事件になるかもしれないのだが、事前に察知することが難しい。たとえば、いじめられ続けてきた子どもが、いきなり刃物で相手を刺す、というような事件だ。事前に子どもが相談に来てくれればなんとかできると思うのだけれど、これまで自分でもそういう事例を扱った経験がないし、事例検討会でそういう事例について相談されたこともない。ともあれ、今日は前者の話をする。

ボスになりたくて暴力を振るっている人は、相手と仲間になりたいと思っているのだが、現代文明は、すくなくとも建前上は、暴力による目標達成を嫌う。だから、教師であれカウンセラーであれ「暴力はいけません」とお説教をすることになる。たしかに、それもある場合には有効だ。たとえば、夫婦間で暴力があるような場合に、最終的に離婚したいのかどうか尋ねてみる。暴力を振るっている方が「離婚したい」と言うのであれば、「暴力を振るうと慰謝料がどんどん高くなりますよ」と示唆する。こういう技法を「相手のスープに唾を吐く」という。アドレリアン・カウンセラーは、こういう意地悪ができるところが何ともいえず楽しい。

現代文明は暴力を嫌っているので、暴力を振るっている当人も、暴力が好ましくないことを知っているのが普通だ。それは学校で暴れている子どもであれ、配偶者を殴っている夫であれ、同じことだ。ただ、暴力以外に所属するための方法を学んでいないので、しかたなく暴力を振るっている。逆に言うと、暴力を振るわなければ、所属が脅かされてしまうと思っている。まずそのことについての理解がなければ、暴力を振るっている人を援助することはできない。